

第13回 「ことば」フォーラム

方言地図の見方・作り方

2003年1月18日（土）
国立国語研究所 5階講堂

大西 拓一郎（国立国語研究所）

三井 はるみ（国立国語研究所）

甲斐 睦朗（国立国語研究所）

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（井上 優） 皆様，本日はここ，国立国語研究所第13回「ことば」フォーラムにお越しいただき，ありがとうございます。本日のテーマは方言地図です。私たちは言語地図と言うことが多いんです。後ろにもたくさん地図が並んでおります。あとで御覧いただければ幸いですけれども，その方言地図，言語地図というものをどうやって作るか，また，その作った地図から何が分かるかということです。そのことを今日は二人の研究員が説明いたします。内輪の話とか苦労話とかも聞けると思います。どうぞお楽しみに。私は，今日の司会を務めます日本語教育部門の井上と申します。よろしく願いいたします。では，さっそく進行させていきたいと思ひます。まず，国立国語研究所所長甲斐睦朗より，皆様に御挨拶申し上げます。

甲斐所長 本日は国立国語研究所の本年度4回目の「ことば」フォーラムに，こうやってたくさんの方がおいでくださりましてありがとうございます。私どもは12月の20日に当研究所の研究発表会を開催いたしまして，国語研究所が取り組んでいる方言文法地図について発表申し上げました。そのときに，実際に方言地図というものを作るということをお皆さんにぜひとも御案内したいと申していたわけですが，今日こうやってたくさんの方がおいでいただいたことを，私ども大変ありがたく思っております。また，今日は韓国の大学の先生も複数名おいでいただいております。また，それ以外のいろいろな方面からお客様がおいでになっております。私ども，お一人お一人をできるだけ大切にしたいと思っております。本日は手話も採用しております。できるだけ発表の上ではゆっくりと，分かりやすい言葉で申し上げるつもりではありますが，つい専門用語が出てしまうということがあるかもしれません。そのときは，ご容赦いただきますようお願い申し上げます。それから，日本の方言地図ということであると，国立国語研究所は昔，松本清張の推理小説の『砂の器』ということで一度取り上げられたことがあります。その原作の映画のなかで，刑事が国立国語研究所に訪ねてきて質問して，研究所の研究員がしばらく考えて「ちょっと待ってください」とか言います。しばらくして「分かりました，分かりました」とか言うんですけども，事実はそうではありませんでした。すぐに答えが出たんだそうでありまして，「ちょっと待ってください」ということではなかったというふうに聞いております。北は北海道から南は沖縄まで，日本はたくさんの方の地域の言葉を持っております。その一つひとつの言葉が日本の言葉の豊かさというものを支えているものであります。一方，書き言葉のほうでは共通語を使っているわけですが，話し言葉のほうでは方言というものを大切にしていきたいということを，これからも私どもは心がけていきたいというように思っているところであります。それから，あとの宣伝でありますけれども，本日は第13回の「ことば」フォーラムであります。私どもは自分たちのこれまで五十数年間で積み重ねてきました研究成果というものを少しずつ，できるだけたくさんの方に知っていただきたいということで「ことば」フォー

ラムを開催いたしております。本年度はあと、3月15日に中目黒の会場を借りまして、社会人が身につけるべき日本語ということについて「ことば」フォーラムを開催する予定であります。またそちらのほうも関心を寄せていただけるよう、御案内を申し上げます。本日、これから長い時間になりますが、できるだけ楽しい内容を展開するつもりでありますので、よろしく願いいたします。以上、御挨拶といたします。

司会 それではフォーラムのほうを始めたいと思います。その前に封筒の中身を確認させてください。まず、「方言地図の見方・作り方」という冊子になっているものがございます。それから、アンケートがございます。こちらのほうは御記入いただいて、お帰りのときにお出しくさるようお願いいたします。それから、ほかに当研究所に関するいろんな資料が入っております。こちらのほうも後ほどごゆっくり御覧いただけたら幸いです。それから、今日の進行について簡単に御説明申し上げます。まず、大西拓一郎、三井はるみのほうから、「方言地図とは何か」「方言地図の作り方」というタイトルでお話をいたします。それから10分の休憩を置いて、「方言地図を作ってみよう」ということで、皆様からお寄せいただいたデータを基に、実際に方言の地図を作ってみようということを実演いたします。そのあとに質問コーナーということで皆様から質問を受け付けたいと思います。どんなことでも結構ですので、どうぞお気軽に質問をお願いいたします。そのあと、ここで一応中閉めということにいたしまして、10分後にパソコンを使って実際に地図を作ってみようという方のためのデモンストレーションを行います。多少専門的な話になりますけれども、興味のある方はどうぞ残っていただいて、デモンストレーションに参加して下さるようお願いいたします。それでは早速、「方言地図とは何か」というタイトルで大西拓一郎のほうからお話し申し上げます。

「方言地図とは何か」大西 拓一郎

(配布資料：p. 1～8)

大西 大西です。よろしくお願いいたします。コンピュータを使いながらお話ししますので、座ってお話しさせていただきます。立っても座ってもあんまり変わりはないんですけども、座ってお話しさせていただきます。方言地図というもので今日はお話するんですけども、まず、方言地図というものは皆さんにあまりなじみの無いものなのじゃないかなと思うわけです。普通の地図であれば、皆さんが道を尋ねながら知り合いのうちにいくとかいったときにお使いになるような地図かと思うんですけども、方言地図というのは一体どういうものか。これについて今日お話してみたいと思っております。たとえば、「行かなかった」という言い方があるわけですけども、これ、全国でどんな言い方があるのかなというふうに調べてみると、「イカナンダ」であったりとか、「イカザッタ」であったりとか、「イカンカッタ」であったりとか。いま主なものを挙げましたけれども、こんな形があるんだなということが分かります。ただ、こういう言い方があるというだけではやはり面白くないわけで、それぞれの形がどこで使われているのかということを知りたくなるわけです。最初に言うのを忘れましたけれども、主にスライドの

ほうを使いながらお話ししますので、お手元の資料はあまり御覧にならなくても大丈夫かと思えます。ただ、後ろのほうでなかなか見にくいという方は、お手元の資料も御利用になりながら、お聞きいただければと思います。こんな形があるということは分かって、それがどこで使われているかということが知りたくなるわけです。そういう方言の形と場所とを結びつけるやり方としてはいろんなやり方があるわけです。たとえば、スライドに挙げましたように、「イカナンダ」というのは近畿地方、中部地方、中国・四国・北陸地方、こういった地方で使われている。「イカザッタ」というのは中国・四国・九州で使われている。「イカンカッタ」というのは近畿や北陸地方で使われている。こういうふうに示すこともできるわけです。これ自体、決して誤りではありません。ただ、非常に大ざっぱだなということがお分かりになるかと思うんです。たとえば、中国と四国というのには、「イカナンダ」というのと「イカザッタ」というのが重なっているわけですが、どの辺が境界線なのかはよく分かりませんし、北陸の「イカナンダ」、また、「イカンカッタ」というのも同じようなことが言えるわけです。では、もう少し細かく地名で出せばいいんじゃないかということが考えられるわけです。こういうふうに地名で出すと、「ナンダ」という形は富山県の西礪波郡にしとなみのほうで使われている。ずっと続いていて、「イカンカッタ」というのは宮崎県のこれこれの地方で使われている、これこれの町で使われているというふうに示すことができます。しかし、先ほどのものよりもかえって分かりにくくなってしまったということがお分かりになるかと思えます。地名を聞いて、その場所がどこであるかというのをすぐに結びつけるのは、そう簡単なことではないわけです。細かな地名が必ずしも皆さんの頭の中に入っているわけではありませんから、そこがどこだというふうに思い浮かべるとするのは難しいことかと思われまます。また、こういうふうに地名を用いるということには別の問題もありまして、地名というものは変わってしまうことがあるんです。この国立国語研究所が今ある場所というのは、北区の西が丘というところになりますけれども、以前は北区稲付西山町とっていたそうです。そうですというのは、私もその時代はさすがに研究所にいませんでしたので、このように言っていたということを古い研究員の方などから聞いていたりします。同じ場所なのですが、住居表示が変わってしまったわけです。最近は大合併などといわれて、ここ10年ぐらいで大幅に地名が変わってしまう可能性があります。変わった当初はいいんですけれども、しばらくたつと古い地名というのは分からなくなってしまいうわけです。そうすると、場所と方言を結びつけるにはどうしたらいいか。正確にやるんだったら、経度と緯度というものを使えばいいということが考えられるわけです。経度、緯度をもって土地を示せば非常に正確です。また、詳しいですし、ほぼ永久的にそれは動きませんから、その場所の指定が可能なのわけです。確かにこれはスライドに示しましたように正確かもしれませんが、かえって分かりにくくなったということがお分かりになるかと思えます。そこで考えられるのが、当たり前の考えといえども当たり前の考えですが、地図を使えば、語形とその場所の関係というのを最も分かりやすく示す

ことができるということになります。地図にして、それぞれの語形が使われている場所を示すわけです。そうしますと分かりやすいということもありますし、場所も正確に指定できるということになります。そのようにして方言の分布を表した地図は方言地図とか言語地図というふうにいわれるものです。いま一言に方言地図というふうに言いましたけれども、実は地図としての表現方法にもいろいろな方法があります。スライドにも書いてありますけれども、一つは語形の記入法です。それから、記号法というもの、それから、塗りつぶし法というもの。主にこの三つの方法が知られています。いちばん上の語形の記入法ですけれども、これは非常に単純な方法です。地図の上に語形を記入していくわけです。これは手順が非常に簡潔です。それが使われている土地に、地図の上で語形を書いていけばいいわけです。ただ、簡素なのですけれども、記入する語形が場所を取ってしまうんです。それから、これぐらい地点数が増えてしまうと分布の様子は非常に把握しづらくなってしまいます。今スライドに挙げていますのは、「(行か) なかった」にあたる各地の語形を地図上に記入してみました。これではとても分布が分からないということがお分かりになるかと思えます。ごちゃごちゃになっているだけで、なんだかよく分かりませんね。先ほどの話にもありましたけれども、今日の会場の後ろのほうに各地で作られている日本の言語地図がありますし、それから、世界中でやはり方言地図というものが作られています。それを展示していますけれども、比較的古い時代のヨーロッパの地図というのは、この語形記入法というのをよく採用していました。後ほど休憩時間にでも、後ろに展示してあります世界の言語地図をちょっと御覧になってみてください。なるほど、地図の上に語形が書かれているんだということがお分かりになるかと思えます。この語形記入法ではなかなか分布が把握しづらいということがありまして、我々のほうで採用しているのは、先ほど挙げましたいくつかの方法のうちの記号法というのを使っております。これは語形を記号に置き換えて地図にする方法です。国立国語研究所が編集している方言地図には『日本言語地図』という地図と、それから、『方言文法全国地図』という2種類の地図があります。これも後ろのほうに実物を展示してありますので、また後ほど休憩時間にでも御覧ください。また、それを見て、感動した、買いたいという方は、フロアーのほうでも販売しているようですので、どうぞお買い求めください。といっても、そう簡単に買える値段ではないというところは非常に恐縮ですが、ともかく、我々のほうで作っている地図集というのは記号法というのを採用しています。また、このような全国図のほかにも、先ほどちょっと申し上げましたけれども、各地域で方言地図というものも編集されています。これは各地の大学の先生、また、方言に関心を持っている方などが地図にして作られているんですけれども、これらの多くも記号法というのを採用しています。これも後ろに展示がありますので、のちほど休憩時間にでも御覧ください。いまスライドに挙げています地図は、先ほどから話題にしております「～しなかった」の地図です。これは元の『方言文法全国地図』から、ある程度簡略にして挙げたものです。実は先ほどの語形記入法も、この記号法の

地図も、両方とも元のデータは一緒です。並べてみましょうか。スライドで左側にありますのが記号法です。右側が語形記入法です。はっきりと違いが出ていて、語形記入法にすると全国の分布の様子が分かりやすいということがお分りになるかと思えます。簡単に説明しておきますと、この「ナカッタ」の地図では、東日本に広く青い地域が御覧になれるかと思えますけれども、これが「～シナカッタ」「ナカッタ」という形です。西日本のほうがいろんな形が御覧になれるかと思えます。赤い地域が主に「ナンダ」です。「～シナンダ」という形です。それから、近畿地方を中心にして赤い地域が御覧になれるかと思えますけれども、その西側にはオレンジ色っぽいような地域があります。これが「ザッタ」の地域です。「イカザッタ」のような形で言う地域です。それから、そのちょうど間に挟まれるように、また、近畿の東側、新潟のあたりに分布している、緑色の地域があります。これが「ンカッタ」です。「イカンカッタ」のような形を使っている地域になります。全体としまして、まず、東と西がきれいに分かれていて、西日本のほうに様々な語形が現れてくるという分布の形を御覧になれるかと思えます。ともかくも、この語形記入法を使ったほうが、少なくとも地図の上にもろんな語形を書き込む方法よりも、はるかに分布は分かりやすくなったということがお分りになるかと思えます。この語形記入法の地図の場合には、地図には凡例というものと、それから、地図本体というものが用意されています。凡例というのは何かといいますと、この地図で左側のところに語形と地図上の記号の関係を示した部分があります。スライドだと、もしかして字が細かくて御覧になりにくいことがあるかもしれませんが、お手元の配付資料のほうがはっきりとお分りになるかと思えます。これは同じものを使っていますので、同じように左側に語形と記号の関係を示した部分があるかと思えます。これが凡例と呼ばれる部分で、これは地図上のそれぞれの記号がどういう語形を表しているかということを示しているわけです。その凡例と地図本体がセットになって方言地図というものになっております。記号法の場合には、こういう凡例と地図本体がセットになっているものです。一般の地図とこういう方言地図の大きな違いはどこにあるかと言いますと、語形を記号に置き換える手段に特別なきまりが無いという点です。今の話だとすぐに分かりにくいかもしれませんが、たとえば、この地図だと「ナカッタ」の類に青っぽい色を与えていて、そしてまた、細長い線などで表現しているわけです。しかし、「ナカッタ」だったらこういう記号じゃないといけないというきまりはどこにもないんです。ところが、一般の地図の場合はどうかと言いますと、たとえば郵便局であつたら郵便マークで表す。小中学校であつたら、漢字の「文」という字をデザインしたようなマークで表すということは皆さんも御存じかと思うんですけども、そういうきまりが方言地図にはとくにありません。この話を聞かれるとちょっと不思議に思われるかもしれませんが、方言地図というものではいろんなものを対象とします。それは「行かない」であつたり、「行かなかつた」であつたり、「どうもろこし」であつたり。これはまた皆さんからデータをお寄せいただいたもので、あとで御覧いただけるかと思えますけれども、様々なものを対象に

するわけです。それぞれを対象にすると、実際には様々な語形が出てくるわけです。「行かない」であったら、「イカン」であったり、「イカヘン」であったり、「行かなかった」であったら、「イカナカッタ」だったり、「イカナンダ」だったり、「イカザッタ」であったり。全体としてはそれらを掛け合わせただけの語形が出てきますから、無限に近い形が出てくる。ですから、地図上でどういうふうに記号にするかというきまりというのは特に作れないということです。さて、いま語形記入法と記号法についてお話ししました。最後にもう一つ、地図の方法として塗りつぶし法というものを先ほど挙げましたけれども、これを御覧いただこうかと思えます。塗りつぶし法というのは、語形が用いられている地域を塗りつぶして表現する方法です。現れる語形が比較的少ない場合には分かりやすくいいんです。ただ、語形の数が非常に増えていたり、また、分布が錯綜する、入り交じって現れてくるような分布だったりすると、この方法を適用するのはなかなか難しくなるんです。いまスライドに挙げましたのは、実は「～しなかった」の「なかった」の地図ですけれども、明治時代に国語調査委員会というものがあって、これは当時、日本の標準語というものを作るのに、どうやって作ったらいいのかということをも目的としてつくられた、国立国語研究所の前身といたらいいんでしょうか、そのような機関ですけれども、そこが明治時代に調査をして、それを地図にしたものです。この当時の地図はこういう塗りつぶし法で描かれたりしておりました。世界の言語地図を見ましても、やはり塗りつぶし法を使っている地図もあるようです。これもまたのちほど休憩時間にでも御覧いただければお分かりになるかと思えます。これを見ても、『方言文法全国地図』、我々がいま編集している地図から約 80 年ぐらい前の調査に基づく地図ですけれども、当時はまだ方言地図を作るという発想も、きちんとした方法も出来上がっていなかった時代ですから、いろいろ苦労して作ったんだろうなという、当時の苦労がしのべれます。ちなみに現在の地図と塗りつぶし法の国語調査委員会の地図を並べてみますと、こんな感じになります。80 年違うから、ずいぶん変わったのかもしれないと思って並べてみるんですけれども、意外に差がないということが分かります。細かく見ると違いはあるんですけれども、大まかに見た場合にはそれほど大きな違いが出てこない。つまり、ここから推測するに、80 年ぐらいではそんなに大幅に方言の変化というものは起こっていなかったということも見られるということです。さて、そういうふうにして我々のほう、また、日本の方言の研究の世界などでは、主に記号法というものを使って言語地図、方言地図というものを作っていくわけですけれども、記号法、つまり、語形を記号に変えていくやり方です。そのときにいろんなやり方があります。記号というものには様々な要素がありますので、その利用の仕方がいくつかあるわけです。利用の仕方によって地図というものの見映えというものはずいぶん変わってきます。主な要素としましては、スライドに挙げましたような色というもの、それから、形、大きさというもの、それから、塗りつぶし方、向きといったもの、こういったものが使われます。まず、その中の色について見ていきたいと思えます。色というのはもっとも目立つ要素です。今

我々が作っている『方言文法全国地図』では6色使っています。皆さんのお手元の地図は白黒でコピーしておりますので、白黒2色しか御覧になれないかと思ひます。スライドのほうでは先ほどからカラーで挙げておりました。このように白黒とカラーを並べてみますと、やっぱりカラーのほうが非常によく分かるなということがお分りになるかと思ひます。とくに東西の対立というものが、カラーのほうがくっきりと浮かび上がって御覧になれるんじゃないかと思ひます。ただ、いつでもカラーが使えるかという、そうでもなくて、通常使える色の数は限られています。とくに普通の印刷物、たとえば我々が研究論文を書くようなもの。だいたい研究論文を書くような雑誌というのはそんなにおカネがありませんから、カラーはなかなか使いません。白黒でやらなければならないということがしばしばあります。ですので、白黒でなんとか対処しようというときには、色というものはいつも使えるものではないということになってきます。色の次に形とか大きさというものです。この形、大きさというものを使うというのも、やっぱり地図を作っていくときの基本になってきます。形の違ひというものを利用することで分布を際立たせるということが可能になります。いま挙げた図では、先ほどの図からわざと東日本の「ナカッタ」というものの記号を平行四辺形に変えてみました。どうでしょう。先ほどに比べると東日本の分布、「ナカッタ」の地域が分かりにくくなったということが御覧になれますでしょうか。二つを並べてみます。左側のほうが「ナカッタ」の東日本の分布に細長い線を与えました。右側のほうではある程度面積を持った平行四辺形の形を与えてみました。右側のほうが「ナカッタ」の分布領域がどうもはっきりしなくなってしまう。左側のほうが東と西の対立がよく分かるということが御覧になれようかと思ひます。つまり、記号の使いようで、さまざまに分布の違ひというものの見え方が違ってくるということになります。右側の図は東日本の分布がちょっと見にくくなってしまったわけです。今度は塗りつぶし方を利用してみるとどうかということを考えてみたいと思ひます。今度は塗りつぶし方を変えてみました。東日本の平行四辺形の塗りつぶしの中を白く抜いたよいな形に変えてみました。そうすると、ある程度は東日本の分布がもう一度分かりやすく出てきたのではないかと思ひます。コントラストが上がったといひますか、そういうことが御覧になれるかと思ひます。こんなふうと同じ形を使っても、塗りつぶし方を変えるとずいぶん印象が変わってくるかと思ひます。また、記号の種類によっては、記号の方向、向きを変えることで特定の分布領域を目立たせるということもできます。うまく使えればそんなふうな利用ができるということになります。二つ並べてみましょうか。左側のほうが東日本の「ナカッタ」の平行四辺形の中を白く抜いてみたもの、右側が中を塗りつぶしてしまったもの。同じ形を使っているんですけども、印象が変わってくるかと思ひます。以上が記号の主な基本的な要素です。色、それから、形、大きさ、塗りつぶし方といったもの。実際に我々が方言地図を作っていくときには、これらの要素を組み合わせながら利用していきます。具体的な話はまた次の三井さんのところで出てくるかと思ひますので、よく聞いていただけるとありがたい

と思います。さて、では、なぜそういうふうな手立てを使いながら方言地図を作っていくのかということですが、ここまでの話でほしい方言地図というものはどういうものかなということは御理解いただけたのではないかと思います。皆さんなかなかなじみのない地図かもしれません。それを旅行に使うというような地図ではありませんから、なかなか皆さんが触れる機会は少ないものじゃないかなと思うんですけども、しかし、どういうものであるかということは、大まか理解いただけたのではないかと思います。次の三井さんの「方言地図の作り方」というところでくわしく説明されるだろうと思うんですけども、この方言地図というものは作るのにけっこうな時間がかかります。実際我々の『方言文法全国地図』というものも、調査の初めから数えて、すでに20年ぐらい編集に時間を要しております。地図1枚作るのに3、4カ月、また、かなり難しい項目だと半年ぐらい時間を要したりします。では、そんな手間をかけて方言地図を作ることが必要なかということです。二つありますけれども、一つは分布を知ること、もう一つはその地図を解釈することになります。まず、分布を知ることについてお話ししましょう。何と云ってもこれは地図にすることで一目で分布が分かるということです。漠然と、これこれの言い方はこの辺にあるはずだというふうに理解されていたもの、たとえばスライドのほうで示しましたように、「イカナンダ」というのは近畿・中部・中国・四国・北陸のあたりにありますよ、「イカザッタ」というのはこれこれの地方にありますよ、「イカンカッタ」というのはこれこれの地方にありますよという情報に比べて、右側の地図のようにはっきりと示すことで、一気に全体の様子が把握できます。まさに「百聞は一見にしかず」といったところかもしれません。我々自身が地図を作っているときの醍醐味だいごでもあります。しかし、我々は決して単にこういう「一見にしかざる」楽しみを得ようということで方言地図を作っているわけではありません。大切なのは、そういう地図を解釈していくということです。方言地図にはいろいろな項目が扱われています。しかし、1枚として同じ分布を示す地図はありません。すべて分布は違っています。とはいっても、まったくばらばらに、みんな無関係に語形が各地に散らばっているというものではありません。分布の見えるその背景には、それを支えている原理というものが働いているというふうに考えられます。それを読み取っていくこと、これは我々の世界では地図の解釈、分布の解釈というふうに呼ばれますが、これが非常に重要なことなのです。たとえばスライドのほうで、左側の地図ですけども、実はこれは左も右も同じようなことを扱った地図です。両方とも「～しなければならぬ」「これから学校に行かなければならぬ」「人の話を聞かなければならぬ」というときの「なければならぬ」です。これを全国でどのように言っているかという地図から必要なデータを抜き出してきたものですが、左側の地図では「～シナケレバオエナイ」「オエン」という地域を茶色の記号で表しています。それから、「～シナケレバデキナイ」、あるいは「デキン」といった地域を緑色で表してみました。これは左側の地図です。そうしてみますと、実は類似の形が遠く離れた地域で存在しているという

ことが分かります。「オエナイ」は千葉県にもあるし、岡山県のあたりにもまとまった分布を見せている。一方、「デキナイ」というのは秋田県のあたりにまとまっていますし、一方で遠く離れた長崎県のあたりにも分布している。こういうふうと同じような語形が離れたところにあるということを基にして、これはどうも中央の古い形がこちら辺になごりとして残っているんじゃないかということを読み取ることができます。これは皆さんの中でも少し関心のある方だったら御存じかもしれません。集圏分布とか方言集圏論といわれる、古い形が地方に伝わって行って、そこに残っているというパターンの一つです。一方で、同じような形がかけ離れた地域にあっても、それが必ずしも古いとは限らないということもあります。スライドのほうで右に挙げている方言地図ですけれども、これは「～しなければならない」というのがひとまとまりになってしまって、もうどこで「ナケレバ」、どこが「ナラナイ」なのか分からないといった語形を示している地域です。「行く」でいきますと「イカンナラン」「イカナラン」「イカンナン」とか、そういった語形がどこに分布しているかというのを表しています。これで見ますと、やはり東と西に同じようなものが分かれて分布しているわけですが、実はこれらは中央の古いもののなごりというものではなくて、言語というものは自然な変化を起こすものですから、その自然な変化の結果、結局、同じような形にたどりついたというようなものが分布の上に現れているというふうに見られるものです。このように同じように周辺部で類似した形が見られるというものであっても、必ずしも中央の古いものの反映とは限らない。自然の変化の結果を見せているといったこともあるわけです。また、それぞれの地図が表現する内容の言語学的な性質を分布することで、変化の細かな過程というものを地図上で探っていくたり、そういったことを総合していくことによって、日本語の方言そのものがどのように形成されていったか、もっと大きく言えば、日本語がどのようにして形成されていったか、そういったことを分析していく。そういった方向でも方言地図というものは利用されていくものです。このように様々な方向から方言地図というものは解釈され、分析されていきます。方言学や言語学の向上のためにはどうしても方言地図というものは必要です。幸い日本には我々国立国語研究所が編纂してきた『日本言語地図』、また、『方言文法全国地図』という大きな全国レベルの方言地図が存在しています。このことがあって日本の方言学というものは世界的に見ても高いレベルに到達することができました。これは我々自身もそうですけれども、非常に誇りにしていいことだと考えております。まさにこういう学問レベルの高さというものは、国民文化の高さとして、世界の研究者からも理解されるものだと思います。そういう高いレベルの研究を支えているのがこのような方言地図であるということを理解いただければいいかなというふうに思っております。一応方言地図とは何かということについて、今日のお話、ここで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。具体的な地図の作り方については、次の三井さんのほうからお話があるかと思います。ありがとうございました。

「方言地図の作り方」三井 はるみ

(配布資料 : p. 9 ~16)

三井 私のほうの話では、現在、国立国語研究所では『方言文法全国地図』というものを刊行しているわけですが、これが方言の調査から出版に至るまで、どんな流れで作成されているかということ、その舞台裏と申しましょうか、お話ししていきたいと思えます。やはりスライドを使いますので、座って話をさせていただきます。失礼いたします。『方言文法全国地図』というのは、先ほどもいくつかの項目を御紹介いたしましたが、そのほかにも、たとえば「東のほうへ行け」などというときの「へ」にあたる部分、この部分を全国でどのように言うか、というようなことも取り上げています。東北地方などでは「東のほうさ行け」といった言い方がある、ということは、比較的よく聞かなくてもいいかもしれませんが、たとえばそういった言い方が全国的にはどういったところに分布しているのか、といったものを取り上げた、いわば文法の方言地図ということになります。皆さんのお手元にあります冊子の表紙の裏を御覧いただきますと、大変小さな字で、やや見にくいかもしれませんが、現在まで刊行しました全部で 5 集の地図のタイトル、それぞれの地図でどんなことを扱ったかという地図のタイトルの一覧がございます。今言いました助詞とか、あるいは動詞、形容詞の活用といったもの、さらにはパンフレットで取り上げていますが、あいさつの言葉のような表現に関するものなど、最終的に全部で 300 面ほどの地図集となる予定です。この地図のための調査は 1979 年から 82 年にかけて、すでに 20 年ほど前になりますけれども、全国の方言研究者約 70 名の協力のもとで行われました。全国 807 の調査地点で、それぞれの調査員が各地で話者の方に直接お会いして、「この言い方をどのようにおっしゃいますか」というふうに質問をし、回答をいただけてきました。その際の調査でお話しいただいた方は、原則として大正末年以前のお生まれの方です。現在ですと 80 代、あるいは 90 代というような年代の方で、原則として、その土地で生まれて、その土地を長い間離れたことはなく、現在もその土地に住んで暮らしていらっしゃる、男性の方 1 名にお願いしました。その方たちに普段お話しになる言葉のうち、とくにくつろいだ、たとえば御家族同士でお話をなさるときとか、あるいはごく親しい方とお話しなさるときに使う土地の言葉をお尋ねしました。実際には、現在の言語生活では、1 人の方が方言と共通語を使い分けるということがあると思えますし、それから、年配の方と若い人とは言葉に違いがある。こういったことは皆さんも身近で御経験のあるところだと思います。そういった意味で、この地図のための調査では、各地の言葉の中でも比較的伝統的な、古いと言ってよろしいでしょうか、そういった言葉に的を絞って調査を行ったということになります。そういったところに各地の地域差、地域による違いというのが色濃く現れるというふうに考えたわけです。『方言文法全国地図』に限らず、一般的に方言地図の作成、特に先ほど説明がありました地図の表現法の中の記号法という方法を取る方言地図の作成には、おおむねこういった流れがございます(資料 : p. 9)。以下、調査をする、回答を記号化する、記号を白地図に記入する、そして、印刷する。この流れに沿って『方言文法全国地図』の場合に

ついでにお話をしていきたいと思います。まず、調査をしなければ地図に載せるための方言は分かりませんので、まず、調査を行います。先ほど申しましたように、全国の方言研究者が各地の方言の話者の方にお会いしてお話を聞いているわけです。今回の地図のための調査では、全国統一の調査票を用いて、文法に関わる全部で 267 の項目を質問しております。質問する際、多くは、こちらで共通語の簡単な文を示しまして、これを何と言いますかというふうにお伺いする。いわば共通語を方言に翻訳していただくといったような質問のしかたが主です。たとえば、「もっと早く起きればよかった」というときの「起きれば」のところはどのように言いますか」と質問し、その土地での普段の言い方を思い起こして教えていただくといった方法です。これ（資料：図 1）が実際の調査票の例です。調査者は話者（話し手の方）に答えをいただいたら、ここに記入していくわけです。方言にはさまざまな発音がありますので、ここでは音声記号が用いられています。話し手の方が言葉に対して、「いや、この言い方は最近の言い方で、昔はしなかった」とか、「うーん、たまにはこういう言い方をすることもあるけれども、普段はあまり言わない」とか一つひとつの言い方についていろいろな説明をしてくださることもあります。そういった話者のほうの説明も、のちに地図を編集したり、それから、先ほど大西さんの話の最後にありましたように、地図を解釈したりするときの重要な手がかりの一つになりますので、調査者はそういったこともこの調査票の中に書き込んでいきます。また、調査の様子は録音でも記録します。調査の結果は 1 項目について 1 枚のカードに転記して、そして、そのカードが国語研究所に送られてきます。これはカードの例です（資料：図 2）。これを見ますと大変巨大なカードのように見えますが、決してそんなことはなくて、一般的な図書館用の大きさのカードです。全国の研究者からこのカードが国語研究所に送られてきて、調査票のほうは調査者の手元に残って、何かのとき、国語研究所で地図を作っているときに疑問点があったときなどに、調査者の方にまた問い合わせるというようなことも行っています。これが送られてきましたらカードケースに入れて、一つ一つの項目ごとに分類して整理してあります（資料：図 3）。今度は研究所のほうで、地図化の担当者がおられますけれども、ここまでが調査から、その結果の報告までということになります。全国からこのようにして、各方言でどのように言うか、についての情報が研究所に寄せられます。807 地点で 267 調査項目ですので、かなりの量になるんですが、これを次に地図化の担当者は整理していくわけです。このカードを基にしまして、現在ですと、たとえばデータベースソフトに入力していったり整理するなどというような形で、地図化のための回答の整理を行ってまいります。まず、最初に検討することが、一体どの回答を地図に載せたらいいんだらうかといったことです。聞くとちょっと意外に思われるかもしれませんが。先ほど言ったように、たとえば「「起きれば」のことは何と言いますか」と伺って教えていただいているわけですから、教えていただいたものを地図に載せればいいんじゃないかというふうに思われるんですが、意外に悩むところがあります。読者の方が「オギリヤー」と「オキレバ」という二つの言い

方を回答された後で、2番目の「オキレバ」という言い方について「これは自分は言わない。自分は『オギリヤー』と言うんだけど、最近若いものが『オキレバ』と言うのも聞くことがあるんだ」。こういったことを教えてくださることがあります。あるいは、「起きれば」というのを何と言いますかと伺うんですが、いろいろ状況を想像して下さって、「そういうときは『寝坊した』と言うんだ」と教えてくださる方がいます。これはたしかにその場面を思い浮かべると、なるほどというふうに思うんですが、これなどはこの調査項目が、文法的な観点で言いますと、いわゆる一段活用動詞といわれる、「起きる」という動詞の仮定形を聞きたいという項目ですので、「オキレバ」と言うのか、「オギリヤー」と言うのか、あるいは「オキタラ」と言うのか、そういったことを主なねらいとしていますので、残念ながら、教えていただいたんですが、地図には載せないということにしております。先ほどの「若いものが使うのを聞くことがある」といった回答も、この地図の基本的な最初の調査の企画としまして、年配の方が御自身がお使いの言葉、というふうなことを想定しておりますので、地図には載せない。ただし、こういう回答があったということは、調査資料としてきちんと整理はし、公開はする。そういうふうにしております。このようにすることによって、ねらいに合った回答だけを地図に載せて、目的とする言葉の分布をはっきりと示すといったようなことを考えています。次に、今度は、どういった回答を地図に載せるのかということが決まりましたら、語形をまとめるということを行います。たとえば「東のほうへ行け」の「へ」に当たる部分を尋ねた項目で説明いたしますと、たとえば、助詞「へ」にあたるものとして、音声記号で[e]という、共通語にもあるような発音のものが回答されているものもありますし、多少発音が違いまして、[e]よりも[i]にちょっと近い、[i]と[e]のあいだのような発音だということを音声記号を使って報告されている地点もあります。さらに調査者によっては、カタカナを使って、「エ」というふうに書いて報告してくださっている、こういった表記のしかたや、細かな発音の違いは整理して、そして、この場合でしたら、表記のしかたや多少の発音は違って、どれも「エ」という助詞であるということには変わりがないと見て、これらはすべてまとめて、山カッコに入れた〈e〉、このようにしたものを地図に載せるというふうにしております。あまりに細かい発音の違い、あるいは表記法の違いまで反映しておりますと、文法の地図というよりは、発音のための地図になりかねません。そういったものも必要かと思えますけれども、ここではこのようなまとめ方をして地図に載せるようにしております。実際にどの発音とどの発音はまとめてしまっているのか、どの発音は区別して地図に載せる必要があるかといったことは、実は判断に迷う場合もあります。この『方言文法全国地図』の中では、語形の統合規則と呼んで、どんな場合にはまとめる、どんな場合にはこれは区別があるものとするといったようなものを決めまして、これに従って語形をまとめるということも行っています。大変細かな手順を踏んでおりますが、これがその一部です(資料：図4)。内容の説明は割愛いたしますけれども、このようなものを踏まえて行っております。次に、3段階目です

けれども、どのような見出し語形で地図に載せるかということが決まりましたら、いよいよそれに記号をあてます。先ほど大西さんのほうからも説明がありましたけれども、言語地図に載せる記号、色、形、大きさ、塗りつぶし方、そして、記号の向き、さらにもっと区別したい場合には記号の本体に小さな線などの補助記号を付けまして、それぞれの語形が地図上ではっきり区別されるように、見やすいように、などといったことを配慮しながら、一つ一つの語形に記号をあてていきます。これが『方言文法全国地図』で用いている記号のセットの一部です(資料：図5)。これも先ほど大西さんのお話の中にもありましたように、どういった記号を使わなければいけないということが決まっているわけではありません。1枚の地図の中はかなりたくさんの語形が掲載されますので、多くの語形を区別することができるように記号のセットを用意してごきます。これを工夫して使っていくということになります。それから、『方言文法全国地図』では、記号を決めるときに、どこにどんな言い方があるか見やすくするということと、もう一つ、似た言い方、似た語形には記号の上でもなるべく似たものをあてるといったことを考えています。これによって、地図を見て、「あっ、ここは似た言い方だな。ここはだいぶ違うな」ということが直観的に把握しやすくなるようにと考えています。たとえば、これは「起きれば」のところを何と言うかということを尋ねた地図の語形と記号の対応表です(資料：図7)。どんな関係であてられているかというのは、どうでしょう、推測がつかますでしょうか。いちばん上が「オキレバ」という言い方です。これを基準にして考えますと、2番目は「オギレバ」となっていて、二つ目の音が「キ」か「ギ」かという違いがごきます。この場合、記号では、色も形も向きも同じですが、塗りつぶし方が違うというところで、この二つを区別するといったような表現をしています。さらに、たとえば4番目の言い方です。これは「オキラバ」というようになっています。今度は「ラ」と「レ」という3番目の音が違っているということになります。この場合は、今度は色も形も塗りつぶし方も同じですが、向きが左向きと上向きで違うといったあて方をしています。そして、下のほうになりますが、「オキタラ」になりますと、これはもうだいぶ「オキレバ」とは違う言い方ですので、色も形も違ったものをあてるといふうにしています。さらに、いちばん下ですが、これは「オギタラ」という言い方で、「オキタラ」と比べると2番目の音が「キ」か「ギ」かの違いです。先ほどの「オキレバ」と「オギレバ」の違いと、違いとしては並行していますね。そこで同じように塗りつぶし方をあてて違いを示す。これは一例ですけれども、たとえばこのような、言葉と、それから、それにあてる記号というのを関係を持たせるということになるべく配慮するといったことを考えています。この地図の実物が後ろにもごきますので、のちほど、御覧になってみてください。はたして分かりやすくなっているかどうか。このようにして決めました1枚の地図に現れるすべての見出し語形と記号の対応表の一覧が、凡例です。ちなみにこれは「起きれば」という地図の凡例で、全部で全国で112の言い方が回答されています(資料：図7)。以上、どの回答を地図に載せるか、どういうふうにして発音の

違いをまとめるか、そして、どんなふうに記号を与えるかというのは、言ってみれば実際に地図を書き始める前の準備段階ということになりますけれども、実はその一つひとつをどういうふうにするかという判断が、意外に言語学に関する知識ですとか、あるいは全国の方言についての知見とか、そういった裏付けが必要になるところでもあります。さて、このようにどの語形にどの記号をあてるか、そして、どの語形を地図に載せるかが決まりましたら、いよいよ地図を書きはじめます。現在、『方言文法全国地図』では最終的な地図はコンピュータで作図を行っています。これにつきましてはのちほどデモンストレーションで実際にコンピュータを操作しながらお話しいたします。4年ほど前の1999年に刊行しました第4集まではコンピュータを使いませんで、ゴム印とスタンプ台を使って、白地図の上の一つ一つ判を手で押すという方法で作図を行っていました。コンピュータと手作業ではだいぶやり方が違うんじゃないかというふうに想像されるかもしれませんが、基本的なところは同じでして、白地図の調査地点に記号を一つ一つ記入するというのが基本です。これが白地図です(資料：図8)。地図の上に黒い点がテンテンというふうに資料では見えるかと思えますけれども、これはそれぞれの調査地点の数字です。先ほどカードのときに、カードの右上に6ケタの数字が書いてあったんですが、全国の調査地点を数字に置き換えて示しています。こういうふうにするので、この調査は20年に行ったものですが、地名が変わってしまっても、のちのちでも、これはこの地点だというのが分かるようにしているわけです。あとは、一つひとつ手で判を押す、あるいはコンピュータを用いて記号を一つひとつの地点の上に置いていくということを行っていくわけですが、その際に少しだけコツがあります。もしかすると皆さんの中にも、実際に大学の授業ですとか、そういったところで方言の地図を作るといったことを経験された方がいるかもしれませんが、こんなコツです。それは、1地点で1人の方が「こうも言うし、こうも言う。あつ、こうも言うな」というふうに、一つのことに二つ以上の言い方を答えてくださる場合があります。その場合、調査地点が混んでおりますので、物理的に二つ、三つの言い方を地図上に記号で置いていこうとすると、うまく記号が入りきらなくなるというようなことがあるんです。たとえば、地点が三つほどありまして、右下の地点では二つの言い方をします。正直に記号を置いていきますと、ごちゃごちゃごちゃと重なってしましまして、これではどの地点がどの回答か分かりませんし、分布が非常に見にくくなってしまいます(資料p14：図)。こういったことを避けるために、実際に地図を作る場合には、より面積を取る複数回答の地点の記号をまず最初に置いてしまうんです。地図に、はんこでしたら、はんこを押してしまいます。そして、そのあとで、複数回答の地点のほうはそのままにしまして、単数回答、これを単用というように言っていますけれども、の地点をわずかに、しかも地理的な関係は保ったまま、ずらして、見やすさを保つということをしています。もちろん、方言地図は、ここではこういう言い方をするのだということを示すわけですから、あまりいい加減に記号の場所をずらしてしましまして、その用をなさなくなってしまう

ますが、たとえば、こんな工夫をしながら、紙の上の地図という形で表現をしています。それから、複数回答の上には音楽の記号のスラーのような形、これはアークと言っていますが、がありますけれども、これはこの両方の回答は同じ地点の回答ですよと示すための、これも工夫の一つというふうに言っているかと思えます。これが複数回答の地点、つまり、これは併用と言っていますが、併用の地点の回答だけを記入した地図です(資料：図9)。そして、こちらがさらにその上に単数回答の地点も記入した、これが完成の地図ということになります。(資料：図10)このようにして作成した地図の原稿を、コンピュータによって作成した場合にはコンピュータ用のデータも一緒に印刷所に渡し、数回の校正を経て印刷物となります。原稿が印刷されてきた段階で、1地点1地点、すべての記号が合っているかどうかをすべて校正していくわけです(資料：図12)。ところで、先ほども触れましたけれども、4年ほど前まではこの『方言文法全国地図』の作図の作業はすべて手作業で行っていました。そのときには先ほどお見せしました記号の一覧にあたるような、こういったゴム印を特別に注文して作ってもらいまして、ごく普通の6色のカラーのスタンプ台で色をつけて、白地図上に押すということをしております(資料：図11)。1枚1枚カードを見ながら、一つひとつ紙の白地図の上に押しております。この手作業の地図は、完成の地図の前に地図化の担当者が、まず1回どんなふうな分布になるか見てみよう、あるいは、だいたいこれでうまくいくと思うけれども、地図として1回作ってみようといったような草稿段階では、現在でも活躍しています。後ろのほうに手作業による地図の例を展示してございますので、よろしかったら御覧ください。以上が印刷物としての『方言文法全国地図』の作成の流れでした。実はこのほかに、現在ではホームページでもこの地図の一部を公開しています。ホームページには出版物になった完成地図の一部のほか、調査票ですとか、あるいは回答の一覧表、それから、地図作成用のプログラムなども公開しております。のちほどまたデモンストレーションでプログラムの使い方などは御説明できると思いますけれども、実際コンピュータを使って作ってみたい、あるいはそうではなくても、地図をちょっと見てみたいというような方、御興味をお持ちの方は御覧いただければと思います。ということで、やや細かい話にも及んだかと思えますけれども、研究所で現在作成しております。『方言文法全国地図』の調査から出版までという流れをお話してみました。実際にたとえば大学の授業などで、狭い県単位とか市町村単位のような地図を作られる場合、まったくこれと同じ流れということはないと思いますけれども、もしかしたらヒントになるところもあるかなというふうに思っております。私のお話は以上です。どうもありがとうございました。

司会 以上、方言地図に関する入門編その1ということで二つの話をいたしました。それでは、これから10分間の休憩をおいて、第2部では、実際に皆様からいただいたデータを基に方言地図を作ってみるということをいたします。5分遅れておりますが、後ろの地図も見ていただきたいので、10分間休憩をとりたいと思います。20分からということですのでよろしく願いいたします。あと、トイレは各階に同じ場所がございます。今日はち

よっと人数がたくさんいらっしゃいますので、各階のトイレ、どうぞ御利用ください。
それでは10分後にまたこちらのほうにお戻りください。よろしく申し上げます。

<休憩>

「方言地図を作ってみよう」大西 拓一郎 (配布資料：p.17~35)

司会 (井上) そろそろフォーラムを再開させていただきます。皆様、御着席ください。
それでは休憩後の第2部、入門編その2ということで、実際に方言地図を作ってみると
いうことを行います。皆様からのデータをいただきまして、それを地図にいたします。
私もちなみにデータは提供しております。私の出身は富山県です。富山県の西のほうの
記号は私の回答です。皆様の回答がどんなふうになっているか、御期待ください。それ
ではよろしく申し上げます。

大西 再び出てきました。方言地図を作ってみようということですがけれども、実はこれ、
作ってみようと言いながら、みんなと一緒に今ここで作るというのではなくて、皆さん
からいただいたデータを元に作ってみましたというほうが正確じゃないかなというふう
に思います。「作ってみました」だと、「京都へ行ってきました」「北海道へ行ってしまし
た」、どこかのおみやげ品みたいな感じになってしまうんですけども、どうぞ皆さん、
お手もとの資料はお持ち帰りいただいて構いませんので、「作ってみました」というふう
に読みかえて、おみやげとしてお持ち帰りいただいても結構かもしれません。今日参加
された皆さんは事前にこういう会だということをお理解いただいているかと思えます。
それで、その際に皆さん自身の方言をお寄せくださいということをお伺いいただいでい
るんだというふうに思います。どのようなことを皆さんからお伺いしたかと言いますと、
まず、お使いになれるのはどこの方言ですかということをお伺いしました。人によっ
ては、必ずしも、自分はちょっと自身がないからということでお答えにならなかったと
いう方もいらっしゃるかもしれませんが、多くの方がどこの言葉を自分は使って
ますよということでお答えいただけたかと思えます。今日は約百十数名の方が御参加い
ただきましたけれども、各地の方言を得ることができました。それからもう一つ、あな
た御自身の御年齢をお教えてくださいということで、a, b, cに分けて、39歳以下、
40歳から69歳、70歳以上ということをお伺いしました。何らかの年齢差のようなもの
が表れているとすれば、これで見ることができかなということを考えて、お尋ねしま
した。これを39歳以下としたら、我々の仲間のほうから、「おまえはどうしてもaに入
りたいから、こんな妙なところで切ったんじゃないか」と言われてしまったんですけれ
ども、だいたい30歳ぐらいの幅を持たせながら聞くと均等に分かれるかなということ
だったので、とくにaを39としたことに他意はございません。それから、いよいよその次
のところからそれぞれの言い方を教えてくださいということで伺っております。お答え
になる場合に選択肢があったほうがお答えになりやすいかなということで、選択肢を設
けながら、ただ、選択肢にない場合もあるでしょうから、その場合は御自身の方言を御

記入くださいということでお答えいただいております。一つ目は、「行かない」というのを何と言いますか。これは注目点としましては「ない」にあたる場所です。ここをどのように言うか。「イカナイ」というふうに共通語と同じような形を使うのか、「イカン」といった形を使うのか、「イカヘン」のような形を使うのかということをお伺いしております。それから、二つ目ですけれども、ここは「(ここは) 静かだ」というのを何と言いますかということをおうかがいしました。これは「静かだ」というときの「だ」のところをどのように言うかという、「だ」のところが目点になります。「シズカダ」と言うか、つまり、共通語と同じ形を使うのか、「シズカジャ」という形を使うのか、「シズカヤ」と言うのか、また、そのほかの形を使うのかということをお伺いしています。三つ目は「とうもろこし」。植物ですけれども、食べ物になる植物。この「とうもろこし」のことを何と言いますかということをお伺いしました。共通語の「トウモロコシ」なのか、それとも「モロコシ」といった言い方をするのか、「トーキミ」のような言い方をするのか、そのほかの言い方をするのかということをお伺いしました。四つ目は、「(あれを) 見ろ」を何と言いますか。「見ろ」というのは、「見る」という、「動詞」と言いますが、その「見る」の命令の形です。これを命令するときになんかどう言うか。「ミロ」という形を使うのか、「ミヨ」という形を使うのか、「ミレ」という形を使うのか、それともそのほかの言い方をするのかということです。それから、最後ですけれども、「読んでしまった」。これを何と言いますか。この注目点は「てしまった」のところにあります。共通語の「ヨンデシマッタ」という形を使うのか、それとも「ヨンジャッタ」という形を使うのか、「ヨンデマッタ」という形を使うのか、そのほかの言い方をするのか。以上の五つについてお伺いしました。お手元の資料では、見開きになっておまして、見開きの左側のほうに、実はここで伺いましたものはすべて、先ほどから話題になっております『方言文法全国地図』というもの、それから、『日本語地図』という、我々の国語研究所のほうで編集している地図でもすでに扱われているものから抽出しております。見開きの左側のほうには全国レベルで調査した結果、それから、右側のほうにはフォーラムに参加していただいた皆さんからデータをいただいた結果、それを対照できるようにして挙げておきました。ただ、1月11日の時点で締め切りとしたものです。これは事前にそこで締め切りますよというふうに申し上げていたんですけども、なかにはその後でも熱心に御報告いただいた方もいらっしゃいまして、この地図にさらにちょっと追加したものなどもあります。あとでスライドでそれをお示ししたいと思います。ちょっと切ってしまうにしのびないですし、我々も貧乏性で、せっかくいただいたデータをなんとか生かしたいなというところがあるものですから、それも挙げてスライドのほうではお示しできるかと思っております。それから、皆さんからいただいたデータのほうでは北海道が載っていません。これは結果的に北海道の方言で答えられたデータがなかったものだから、そこで北海道は挙げておりません。一方、これはもともと多少予想されたことではあったんですけども、東京都が非常に多いです。これは当然といえば当然、この研

究所が東京都にございますから、近隣の方の御参加も多かったということだろうと思います。東京都のところが非常に込み合ってしまうので、そこを拡大する形で、日本列島の左上のほうに東京都だけちょっと独立させて地図を挙げておきました。基本的には全国地図のほうにあるものと同じですけれども、それをもう少し細かくして、詳細に見られるように挙げているものです。それでは、まず、「行かない」から見ていきたいと思えます。今スライドに挙げますのは「書かない」ですけれども、「行く」でも「書く」でも基本的には同じような結果が出てくるものです。「ない」のところが注目点ですから、ここで見ていこうと思います。これは『方言文法全国地図』からのデータを基にして地図を描いたものですけれども、広く知られていることですが、東日本に広く「ナイ」という形です。「行かない」とか「書かない」という「ナイ」が分布しています。スライドのほうで青色で示した地域がそれに当たります。一方、西日本のほうに「ン」とか、「ヘン」「セン」という形が分布しています。これは「カカン」「イカン」という「ン」です。また、「イカヘン」とか「カカヘン」という「ヘン」とか「セン」とか、そういう形をまとめたものです。はっきり言うと、これは東西が分断されて見られる地図として古くから有名ですけれども、このようにして東西がコントラストを成して分布している様子が御覧になれるかと思えます。細かく見ますと、いくつかほかの形も見えますけれども、基本的にこの二つで分かれているという分布を示すものです。一方、皆さんから得られたデータのほうで示してみます。どうしても全国まんべんなく調査した結果ではありませんから、先ほど程きれいなコントラストは見られませんが、しかし、やはり西日本のほうに「イカン」、あるいは「イカヘン」「イケヘン」のような形が分布していて、そして、東日本のほうに広く「イカナイ」というのが分布しているという様子が御覧になれるかと思えます。よく見るとちょっと、埼玉県のあたりでしょうか、「イカン」のような形がポツッと見られますけれども、これはどういう理由によるものなのかはよく分かりません。もしかしたら文章語的なもののようなものとか、あるいは、普段の言い方をお伺いしたんですけれども、何かとくに強調したような言い方とか、そういったものが報告されているのかもしれませんが。ともかく、大きく見てみた場合、二つの地図を並べてみますと、おおむね左側の全国地図、それから、右側のフォーラムで集めた地図、分布領域にほぼ違いはないということが確認できるかと思えます。次は二つ目の項目ですけれども、「(ここは) 静かだ」というときの「静かだ」。これも先ほど申し上げましたように、「だ」のところが注目点になります。どのように分布しているのか示したものです。大まかに言いまして、東日本のほうの茶色の色の領域、それと西日本のほうの、かなりまだら模様の領域というところで分かれているという様子が御覧になれるかと思えます。東日本の茶色の領域というのは、これは「シズカダ」の領域です。それに対しまして西日本のほうで、赤いのは見えにくいでしょうか、赤い領域というのは「シズカジャ」という地域です。それから、近畿地方のあたりを中心に大きくまとまっている^{だいたい} 橙色の領域、これは「シズカヤ」のような領域になります。さらに、橙色の領域から西の

ほうにずっと広がっていますけれども、青い色の領域ですが、コレハ「シズカナ」という言い方です。共通語で言いますと、「シズカナ」というのは、「ここは静かなところ」とか、「静かな場所」というふうに、何かあとに続く形というふうに理解されるかと思えますけれども、この西日本の青い領域では、「ここは静かだ」と言い切ったときに「ここは静かな」というふうに言うというものです。それから、色ではちょっと御覧になりにくいかもしれませんが、九州のほうに「シズカナ」と言う地域が御覧になれるかと思えます。九州の西のほうです。このあたりでは通常の形容詞といわれるもの、「高い」とか「赤い」というのは、「タカカ」とか「アカカ」、「よい」というのは「ヨカ」というふうに、カ語尾というふうに我々の世界で呼んでいますけれども、そういうものが使われます。「静かだ」というのは形容動詞ということで、形容詞と違うんですけれども、同じように物の状態といったものを表現するものですから、形容動詞が形容詞のほうに入り込んだような形を取って、そして、「シズカカ」のような形を採っているというものです。それでは、皆さんからいただいたデータを基にして描いた地図を見てみたいと思います。これも分布領域としては先ほどと似ております。やはり東日本のほうはほとんど「シズカダ」であって、そして、西日本のほうには「シズカジャ」とか「ヤ」とか、それから、ポツンと「ナ」というのがあったりとか、それから、「シズカカ」というのも確かに見られる。よく見ますと、いちばん下のほうに「(ここは)シズカネ」というのがあるといいます。これはもしかしたら、「あ、ここは静かね」というふうに感嘆の気持ちなどが加わったものである可能性もあるんですが、違う可能性もあります。これはやはり「シズカダ」にあたる形である可能性もあるだろうというふうに思います。この地域ではさらに、「シズカカ」のような形容詞のほかに、「シズカナ」という形をもう一度形容詞にしていくという力も働いているということが研究上知られておまして、それは「シズカナイ」のような「イ」をさらにくっつけて形容詞にしてしまう。そうすると「ナイ」というのが「ネ」に変化して、「シズカネ」という形で、もう一度形容詞に持つていくという力が働いていることが知られていますので、おそらくそれに当たる形ではないかなというふうに考えました。ですから、我々の地図と皆さんのフォーラムの地図を並べてみますとこんな感じになりまして、おおむね分布領域としては左と右はほぼ重なっているということが言えます。ただ、我々のほうで得られなかった「シズカネ」のようなデータが今回のフォーラムの中で得ることができた。「シズカネ」というのは実は我々の全国地図のほうではないんです。しかし、今回のフォーラムの中で新しい言い方が発見されたということが言えるかと思えます。一つ収穫になったなというふうに思います。その「シズカネ」というのはどうも新しい言い方であるということが知られておまして、ちょっと世代別に地図を作ってみました。これはフォーラムの参加者の皆さんのデータを基にしたものです。左側が39歳以下の方の御回答です。私も左側にかろうじて入れていただくことができました。入れていただくことがと、自分で作りながらいうのもおかしいんですけれども。右側が40歳以上の方のデータを基にしたものですが、やはり「シズカネ」

というのが先ほど注目される語形だということを申し上げましたけれども、若い年代層のほうで得られているということが分かりました。ただ、一方で、「シズカナ」という形は右側では得ることができなかつたんですけれども、左のほうの地図で現れているということも見られます。いずれにしても文法地図のほうで得られなかつたデータが、こういう会を開くことで得ることができたということです。次は「とうもろこし」です。白黒で申しわけないんですけれども、これは『日本言語地図』という、文法地図の前に編集していた地図集を基にして作成してみた地図です。全国の語形を見て見ますと、「トーモロコシ」があつたり、「モロコシ」があつたり、「トーキビ」があつたり、「ナンバントーキビ」があつたり、「ナンバンキビ」があつたりということで、さまざまな語形が存在していて、けっこう分布としてはおもしろいと同時に、やや複雑な分布を示しております。「とうもろこし」というのは、「トーモロコシ」という共通語形であつて、「とうもろし、とうもろこし」と言っていると、それだけだと気がつかないんですけれども、よく考えてみると「唐」と「諸越^{もろこし}」なわけで、両方ともこれは昔の中国を指した言い方です。「唐」と言った場合もありますし、また、中国のことを指して「諸越」と言っていたこともある。そのほかの語形を見てみても、「トーキビ」であつたり、「ナンバン」であつたり。これもやはり、中国ではありませんが、外国であるということを行っているわけです。さらには、「唐」と「諸越」だったら、両方とも中国だから、いいようなものですが、しかし、「ナンバントーキビ」ということで、「南蛮」、つまり、中国ではない国のことを指している言い方と「唐」というのを組み合わせた言い方が現れてきているということが見ることができます。つまり、もともと「とうもろこし」という植物が日本に存在していたわけではなくて、外来のものとして入ってきた。その外来種の植物に対して、外来種であることを表すべく、こういう語形を当てたということも、この語形から推測することができるものです。全体としてはちょっと複雑な分布ですが、皆さんからいただきましたデータを基にしたフォーラムの地図を見てみましょう。そうするとこのように描くことができました。これを見てみますと、なんとなく散漫に見えてしまうんですが、実は『日本言語地図』の全国地図と並べて見てみますと、けっこう分布は重なっているということがよく分かりました。東北地方などに「キミ」のような形が存在していますが、やはり同じような地域で『日本言語地図』のほうでもそれが確認される。また、「トーキビ」のような言い方が九州地方に存在していますけれども、これは『日本言語地図』のほうでも同じように確認されます。フォーラムの地図のほうではどうしても全国すべてをまんべんなく調べるということではできませんでしたが、皆さんからいただいたデータを抽出して、それを地図の上に描いてみると、決して全国を調査した結果と違わない結果が得られたということが言えようかと思えます。その点から言いますと、我々の地図のデータにも決して誤りはなかつたし、それから、今回参加していただいた皆さんの結果も決して誤りではなかつた。相互が照らし合わせることによって確かさを検証することが可能であつたというふうに思います。続きまして、これは「見

ろ」です。「見る」という動詞の命令にあたる形です。これも大きく見るならば、東と西が対立した分布ということができようかと思えます。東日本には広く「ミロ」という形が、緑色の地域ですが、分布しております。それから、西日本のほうには「ミロ」と接するようして「ミヨ」という語形が分布しています。これは中部地方から近畿にかけてで、それがずっと四国を経て九州のほうにつながっています。一方、近畿を中心にして西日本、中国・四国のあたりには「ミイ」とか「ミ」という形です。これは「これを見ろ」というのでなくて、「コレミ」という形で表現しているわけです。こういう語形が分布している。さらによく見ますと、東と西に分断されるような形ですけれども、「ミレ」という形が分布しています。東北地方の日本海側、それから、九州地方の西側になりますでしょうか、そこに「ミレ」という形が分布しております。先ほど、遠くに離れ離れに分布していても、新しい可能性があるということを申し上げましたけれども、実はこれなどはそれでして、自然な変化の中で遠くはなれたところで、別々のところで同じような変化を起こし、結果的に類似した語形に至ったというふうなものが見られているのです。それでは、フォーラム地図のほうを見てみましょう。これがフォーラムで得られた結果ですけれども、若干の違いはあるんですけれども、おおむね東日本のほうが「ミロ」であって、西日本のほうに「ミヨ」という形、または「ミ」という形が分布している。それから、東北地方のほうに「ミレ」という形が分布している様子が御覧になれるかと思えます。ただ、いくつか違いがあります。二つ並べてみます。そうしますとフォーラム地図のほうに語形の変種がちょっと多いんです。どの辺が多いかと言いますと、凡例のほうで下のほうに固まっているもので「ミナ」とか、「ミテ」とか、あるいは「ミヤンセ」「ミッセ」「ミヤ」「ミンシャイ」、こういった形がたくさん出てきているんです。これはおそらく各地の敬語的な形、あるいは多少やわらかな言い方に変えたもの、そういったものが出てきているものではないかというふうに思われます。左側の図ではそれは出てきていません。これは実はもともとの報告では出てきているんです。『方言文法全国地図』の調査の回答の結果としては。ただ、この地図では「見る」という動詞の非常にくだけたと言いますか、親しい間柄で命令をするときにどういう言い方をするかということに注目点を絞ったものですから、そういう敬語的な形は省略する形で地図に編集しました。ですから、実際にはあったんですけども、それを省略してしまったので、左側の地図には出てこないんです。右側では、せっかく集まったものだから、挙げてみたほうがいいだろうということで、それをすべて挙げたものですから、そういう形が、敬語的な、通常の言い方と言いますか、わりとくだけた形よりも、少しやわらげた、あるいは丁寧な言い方が現れてきているものだというふうに考えられます。この辺、そういう場面を設定して見てみると、また違った地図が描けるということがあるのではないかというふうに思われます。最後の地図ですけれども、これは「読んでしまった」です。先ほど申し上げましたように、「～してしまった」、「てしまった」に当たるところが注目点になる地図です。実はこの地図、ちょっと面白いのは、「読んでしまった」というのが

共通語というふうを考えられるわけですがけれども、共通語の形はおおむね、たいていの地図では東京を中心として、その近郊に分布していることが多いんです。ところが、この地図では「テシマッタ」「ヨンデシマッタ」という形は東京近郊ではあまり出てこないんです。むしろ何が出てきているかという、「ヨンジャッタ」という形です。これが出てきている。じゃあ、「ヨンデシマッタ」はどこにあるかと言いますと、これはむしろ東北地方のほうに分布しているということが分かります。だから、「ヨンデシマッタ」の元にあたる形が東日本の端のほうに追いやられていて、もっとそれがまとまってしまったと言いますか、一つに固まってしまった「ヨンジャッタ」のような形がむしろ東京を中心として分布している。その間に挟まれるように「ヨンジマッタ」のような形が、これは福島県の辺りでしょうか、この辺に分布しているということで、語形変化の段階的なものだというふうを考えていいかと思えますけれども、これがわりと連続してきれいに現れているものです。一方、西日本のほうはどうなっているかと言いますと、これは「ヨンデシモウタ」のような形です。これが広く分布しています。その中をよく見てみますと、近畿地方などを中心として、「ヨンデモウタ」のような形が分布している。さらに九州のずっと端のほうに行きますと、「ヨミトッタ」のような、「テシマッタ」とはまた別のものを取り込んで別の語形を作り上げるような、そのような分布も見取ることができるという地図になります。それではフォーラム地図のほうを見てみましょう。フォーラム地図のほうでもおおむねそれに沿った形で出てきていますけれども、多少改まったような形で報告されたのか、東京を中心として、むしろ「テシマッタ」の形が、わりと東京都の地図のほうを見ても多く現れているということが分かるかと思えます。この辺は我々の質問での設定の段階で、非常にくだけたと言いますか、友人と親しい人と話すときの言い方ということに必ずしも限定していなかったもので、この「テシマッタ」の形が現れてしまった、もしくは、選択肢の形をとっていますから、実は「ヨンジャッタ」のほうをよく使っている、「テシマッタ」のほうを選択されていたということがあるのかもしれない。ですから、「テシマッタ」を選択されている場合でも、実際には普段の言葉としては「ヨンジャッタ」のほうを使っているということがあるということは考え得ることではないかと思えます。二つ並べてみると、東京近郊の様子はフォーラム地図のほうはちょっと赤が多いかなということが御覧になれようかと思えます。それから、いくつかフォーラム地図のほうで、『方言文法全国地図』、我々の全国図のほうでは得られなかった語形が見られました。これもそういうことで見てみますと、御覧になれますでしょうか、東京の東のほうになりますけれども、青い色で「ヨンジッタ」という形が分布しているんです。大きい地図のほうでちょっと出してみましょ。茨城の辺り、それから、東京都の辺りです。この辺に「ヨンジッタ」という形が出てきております。これは皆さんもお耳にされたこともあるかもしれませんが、新方言というものがありまして、若い世代で新しく語形が発生していて、しかもそれが従来の共通語の形とは違うものが新しく発生しているということが知られている。その中の非常によく知られた例

として、この「ヨンジッタ」というのがあります。そうするとやっぱり若い世代かということになるので、世代別の地図を作ってみると、左側が39歳以下です。右側がそれ以上ということになりますけれども、やはり若い世代のほうでこの「ヨンジッタ」という形が発生しているということが御覧になれると思います。共通語化というものが進んでいて、全国的にだんだん均等化しているということはあるんですけども、しかし、その中でやはり言語の変化というものは止められません。これは自然な変化ですから、その中で新しい形が生まれて、また地域差というものが生み出されている様子。そういうものもこのフォーラム地図の中で得られたということで、いくつか成果が得られた。一つは我々の地図と参加者の皆さんのデータを照合してみると、相互に検証が可能であったということ、また、地域で発生している形も確認できた、また新たな地域差が生まれてきているという様子も分かった。いま申し上げましたような三つぐらいの成果を、このような形でデータを皆さんから寄せていただくことで得られたかなということで、感謝申し上げたいと思います。以上で今回の「作ってみよう」、「作ってみました」と言うべきかもしれませんが、お話については終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

<休憩>

【地図作りのデモンストレーション】

(配布資料 p. p28~35)

大西 これから進めるお話というのは、コンピュータで方言地図を作っていく、そのやり方についてお話いたします。最初の10分ぐらいで大まかな流れを御説明いたします。最初の10分ぐらいのところはスライドを使って説明しますが、そのあと、実際のコンピュータ画面の上でどういうふうにしてやっていくかということを示しますので、けっこう細かな画面になっていきます。ですので、なるべく前のほうにお座りになったほうが見えるかと思います。後ろだとよく見えないかと思うので、どうぞ、ぜひ前のほうに、席はまだ空いておりますので、お移りいただければと思います。それから、けっこう細かな話になってきますので、よく分からないというところもあるかと思うんです。基本的なやり方についての説明は、今日の配布資料の最後のほうのところに載せておきました。そこだけちょっと文体が違う。それまでは全部「です、ます体」なのが、そこから突然、「だ、である体」になってしまっているんですけども、そこら辺が説明の話で、これは別の雑誌に書いたものから抜き出してきたものです。それはうちの研究室のホームページでも全体がダウンロードできるようになっていますので、そちらでもう少し詳しいことも御覧になれるかと思います。それでは、まず、コンピュータで作る、我々のほうでやっているやり方について、簡単に流れをお話してみたいと思います。どういうふうにしてコンピュータで方言地図を我々のほうで作っているかということですけども、基本的にはイラストレータというソフトを使っております。イラストレータというソフトの上で動かして地図を作るということを行っているんですが、ちょっと前までは

コンピュータで方言地図を作るというのは、まず、コンピュータ自体の能力がかなりのもの、大学などの大型計算機センターの大型計算機のようなもの、それから、ソフトのほうもかなり特殊なものを使わないといけないということがあったんですけども、最近、コンピュータの性能も相当上がってきておりますし、それから、ソフトのほうもそれにあわせるように、かなり高度なことがパソコンレベルでできる。我々が研究室のほうで使っているコンピュータも決して特別なコンピュータではありません。市販されている、いわゆるウィンドウズマシンを使っています。それも『方言文法全国地図』第5集を作ったときはちょっと前に買ったマシンだったものですから、古めの機械でしたけれども、それでも何とか動いて、作っていくことができました。それから、その上でイラストレータというソフトを使っています。これも市販されているソフトです。7, 8万円で、ちょっと高めではありますがけれども、この近所かどうか分かりませんが、ビック何とかとか、ヨドバシ何とかとか、そういう量販店でも売っているソフトです。今日は学生さんの方も多くお見えかもしれませんが、学生さんの場合はイラストレータも、7, 8万が、アカデミック・ディスカウントというので安めに買えるものです。研究所は残念ながらアカデミック・ディスカウントが効かなくて、まともな値段でしか買えなかったんですけども、イラストレータを作っている会社はアドビという会社ですけども、アドビという会社は我々のことをアカデミックな機関ではないというふうに見てくれているのではないかと思います。イラストレータというソフトはどういうものかということですけども、いわゆる画像ソフトです。画像ソフトですけども、画像ソフトには2種類のものがありまして、一つはビットマップというデータ形式でデータを扱っていくものです。皆さんの中でもデジカメをお使いになる方がいらっしゃるかと思いますけれども、これはデータの形式がビットマップといたしまして、画像を点の集まりのようなものとして扱っていくわけです。それに対しましてイラストレータはビットマップとは違って、画像をベクトルのデータとして扱っていきます。多少分かりやすい例で言いますと、しばらく前からコンピュータを使っている、あるいはワープロ専用機を使っているという方であれば、文字にギザギザが出るか出ないかというところで、ある時期にかなり変革が起こったということを感じていらっしゃる方がいらっしゃるかもしれません。文字にギザギザがあったころというのは、実は文字のデータ、フォントといたしまして、これを点の集まりとして扱っていたんです。ところが、ツルータイプのような、文字のギザギザがなくて、非常にきれいになった。これは曲線のようなものを、点の集まりではなくて、ベクトル、数値的なデータとして扱っていくことができるようになった。イラストレータというのはそういうふうに画像を点の集まりではなくて、数値的なものとして扱っていく。そういうソフトです。決してこれはビットマップがいけないという話ではありません。それは一長一短ありますけれども、我々の言語地図の中で扱っていくときには、このイラストレータのようなベクトル形式のデータの地図がいいというふうに判断してイラストレータを利用しているものです。イラ

イラストレータの中ではレイヤーというものでデータを扱っていきます。レイヤーというのは何かといいますと、これも身近な例で言いますと、OHPの透明なシートのようなもの。その上にたとえば日本地図を置き、また別の透明シートの上に、たとえば北海道とか、本州とか、九州と書いた文字列を置いておく。それから、別のシートの上に記号を置いていく。これは全部透明ですから、重ね合わせるとこんなふうな地図になるということで御理解いただければいいかと思います。イラストレータというソフトを使いますが、イラストレータだけで自動的に言語地図を作るということはできません。イラストレータはあくまでも絵をかいていくというソフトです。各地点の上に手作業で一つひとつ記号を置いていくということはできますけれども、これでは当然いままで紙の上ではんこを押していった作業と変わらなくなるわけです。自動的に何とかして記号を置いていくということをやらせようということで、こんなことを考えて実行しました。それはどういうことかと言いますと、たとえばシートの上に Grammar, Atlas, of, Japanese, Dialects という、これは『方言文法全国地図』という英語ですけれども、並べておきます。これは文字列として置いて置きます。それで、たとえば記号として、丸とか、三角、上向きの三角とか、下向きの三角とか、正方形のような記号を使いたい。これを、イラストレータの中にスウォッチという名前の機能がありますので、そのスウォッチとしてそれぞれの記号を登録します。これは名前をつけて登録します。丸であれば1番、上向きの三角であれば2 a, 下向きの三角であれば2 b, 正方形であれば3 というふうに番号をつけて、これを登録します。次に、各文字列をどういうふうに置き換えるか。Grammar は1番、丸にしましょう。Atlas は2 a, 上向きの三角形, 3番, 正方形, この両方が並ぶようにしましょう。of は2 a, 上向きの三角形にしましょう。こういうデータを作っておきます。先ほど言いましたように、イラストレータ単体では地図を自動的に書くことはできないんですけれども、この文字列をこの表にしたがってこの記号に置き換えるということをイラストレータで自動的にできるようにプラグインというものを開発しました。開発したプラグインを我々のほうでLMSというふうに呼んでいますけれども、ランゲージ・マップ・システムの略です。LMSというものを作って、それをイラストレータの中に読み込ませる。非常に簡単な作業でこれができるようになっています。ウインドウズのやり方で言いますと、フォルダの中にこのLMSのプラグインのファイルをぽんと放り込むだけで済みます。そうしまして、プラグインを組み込んだイラストレータの上でこれらの内容を実行するとどうなるかという、これらの文字列はこういうふうに置き換わる。つまり、Grammar は1番の丸に置き換えましょう。Atlas は2番の a, 3番, 正方形, それが両方の併用になるように置き換えましょう。Dialects というのは3番ですから、正方形に置き換えましょう。つまり、文字列を記号に置き換えるということを、LMSというものを使ってイラストレータの上で自動的に行う。こういうことができるようにしたということです。これを組み合わせることによってイラストレータとLMSによって言語地図ができる。イラストレータというソフトはベクトルデータで

あるという点で非常に有利ですけれども、それだけではなくて、印刷との相性が非常にいいんです。我々の言語地図というのは最終的に印刷物にするという目的がありますから、印刷物にするときにイラストレータというソフトで作ったデータであれば、ほぼそのまま印刷所のほうに渡して、手間なく印刷物に回して行くことができる。我々が依頼している印刷所、今日後ろのほうで販売に来てはいますが、財務省印刷局だけではなくて、多くの印刷業界でイラストレータというソフトを使っていますから、たとえば私が論文を書くときなどにも、イラストレータというソフトで図表を書いておくと非常に相性がよくて、あまり校正の手間を取らないデータがやり取りできるという点でも非常に有利だということがあります。あまりイラストレータのことばかり言っていると、私はなんだか回し者のような感じになってしまいますけれども、別に何も賄賂はいただいておりませんので、御心配なく。実際にどういうふうにしてデータを作っていくかということになりますけれども、まず、調査地点に番号のようなものを与えておきます。たとえば北海道の静内郡静内町であれば、18番という番号を与えたりする。いちばん下のところの長野県の飯山市であれば、80番という番号を与えておく。その番号を基にして各白地図の上の地点に番号を置いていきます。これだとよく分かりませんが、もうちょっと拡大してみますと、赤いマークがついているところにはそれぞれこういうふうに番号がデータとして置かれているわけです。これはテキストの文字列のデータとして置いてあります。次に、該当する地図の中で必要な記号を作って、やはりこちらにも番号を与えておきます。たとえば、「ありがとう」という記号であれば、茶色の丸には1番の番号を与えましょう。「ありがとうございます」という語形の丸のちょっと塗りつぶした記号であれば、2番という番号を与えましょう。以下、順次ずっと番号を与えておくわけです。これが先ほどスウォッチというところでお話しました記号に与えた番号です。実際にスウォッチに登録しますとこんな感じになります。この丸の記号には10番という番号が与えられている。この丸の記号には11番という番号が与えられる。こういう形です。次に、地点に与えた番号と記号の番号の一覧表を作ります。これは皆さんにおなじみのものと言いますと、エクセルでもできますし、それから、基本的にはテキストデータで、地点の番号と記号の番号がコンマで区切られたデータであれば大丈夫です。よくCSVというふうに言われているデータですけれども、コンマで区切られたデータです。これを作っておきます。基本的にテキストデータで作っておけば、まず問題はありません。次に、イラストレータの上でプラグインというものを立ち上げます。これはプラグインの立ち上げのやり方です。イラストレータの中のフィルターというメニューの中から、プラグインを組み込んでおけば、こういう言語地図というのが出てきます。プラグインを入れていないとこれは出ません。アドビがこんなものを最初から用意してくれているわけではありませんので、組み込んだら、これが出てくるようになっていきます。そして、立ち上げますとこういうようなメニューが出てきて、いくつかのオプションが選べるようになっていきます。たとえば、ここのところはオ

プシオンではありませんけれども、CSVの、どこにあるかということを選択できるようなウインドはこれで開きます。それから、先ほどレイヤーというお話をしましたけれども、地点の番号がおいてあるレイヤーをここで選択する。そして、いよいよオプションですけれども、置いてあるテキストを消してしまうのか、残しておくのか。もし変換した場合に、新しいレイヤーを作って、また併用の地点を分けるのかどうか。併用のレイヤーを分けるというのは、どうしてこういうものがあるかということ、先ほど三井さんのお話でありましたように、併用と単用を分けてデータのずらしを行ったりすることがありますので、分けておくと実は便利なのです。単用のところだけをいじって、ずらしを行うということができたりするものですから、こういうのができるようになっています。そして、それぞれのオプションを選択しておいて実行ボタンを押せば、こんな形で、これは「ありがとう」の分布ですけれども、一気に、本当にあつと言う間ですけれども、あつと言う間に全国地図が描けるというふうになっているわけです。手間としては最初の各地に番号を置いておく白地図作り、ここのところが多少、手間と言えば手間です。ここを確実にやっておくと、あとはこれをベースにしていろんな地図が描けますので、皆さんのほうで何か地図を作ってみようというとき、いちばんここのところに神経を使いますけれども、一度ここをきちんと作っておくと、あと、非常に便利であるということと言えます。以上、全体の大まかな流れについて話をいたしました。具体的な作業については次のところで入りますけれども、ここまでのところで何か質問がございましたら、受けたいと思います。実際にやってみないと、ちょっとよく分からないというところもあるかと思えますけれども、また、さっきまでとずいぶん話の中身が違うなということで、戸惑いを覚えている方もいらっしゃるかもしれませんが、その点はちょっと話の流れが違っているという点で御了解ください。よろしいでしょうか。じゃあ、実際にイラストレータを使って、データをどういうふうにいじっていくのかというところをお見せしたいと思います。ちょっとコンピュータの設定を変えないといけませんので、1、2分お待ちください。よろしいでしょうか。1、2分というほどもかかりませんでした。先ほどのGrammar, Atlas, of, Japanese, Dialectsというのが置き換わるというところを、まず最初、お見せしたいと思います。今のはイラストレータの立ち上げの場面です。先ほどの使ったのともデータは同じですけれども、こういうふうにしてGrammar, Atlas, of, Japanese, Dialects というのを置いておきます。それと別にこういうふうな記号の対応というものが必要なわけです。この図の上で置きたい記号が4種類あったとして、4種類のうちの丸には1番という番号を与えましょう、上向きの三角形には2 a という記号を与えましょう、下向きの三角形には2 b という記号を与えましょう、正方形には3という記号を与えましょうということを考えておくわけです。それをここにスウォッチというのがありますけれども、スウォッチというところへ登録します。登録のしかたとか、あまり細かなところを説明してもしかたがないというのか、その辺は書店などへ行きますと、攻略本というのでもないんですけれども、イラストレー

タの使い方とか、そんな説明がありますが、簡単に言いますと、ここの記号を選択して、そして、ここのところで登録するということができますので、その手順でやれば簡単にできるものです。そして、次に、Grammar, Atlas, of, Japanese, Dialects というテキスト、文字列、これらをこの記号とどういうふうに関連づけさせるかというデータを作ります。そうすると Grammar というのを記号の 1 番の丸に置き換えたい。Atlas という文字列を 2 a と 3 の併用にしたい。of というのを 2 a にしたい、Japanese を 1, 丸と 2 b, 下向きの三角形と 3 の併用にしたい。三つの併用ですね。それから、Dialects というのを 3 の正方形にしたい。結局、こんなようなテキストです。Grammar は 1 番の記号, Atlas は 2 a, Atlas はさらに 3, of は 2 a, Japanese は 1, Japanese は 2 b, Japanese は 3, この三つの併用, Dialects というのは 3 番の記号に置き換えるということです。イラストレータの上でこれを作ってもだめで、別にテキストファイルというのを作っておくことが必要です。それはどんな形のテキストファイルになるかと言いますと、これはテキストファイルを作るソフトでやればいいんですけども、テキストファイルを作るソフトというのは、基本的にはウインドウズのコンピュータであれば、どんなものでもついてくるメモ帳とか、今ここで立ち上げているのは秀丸というソフトを使っていますけれども、Word でも気をつけて使えばテキストファイルというのは作れます。いわゆるワープロソフトでも作れるものです。それでこういうふうに Grammar は 1 番, Atlas は 2 a と 3 の併用, Japanese は 1 と 2 b と 3 の三つの併用, Dialects は 3 の記号に置き換える。こういうデータを作っておきます。そして、ここで事前に LMS を登録してあるイラストレータであれば、このテキストからオブジェクトに、オブジェクトというのは記号のことを意味していますけれども、置き換えるプラグインというものを立ち上げて、そして、先ほどのテキストファイルを選択します。そして、一応すべてのテキストを残しておくことにして、新しいレイヤーを作っておくことにします。もとのテキストを残しておきますと、またあとで使い回しが効きますから、残しておくほうが無難かと思えます。これで実行しますと、今もうすでに置き換わっています。ちょっと分かりにくかったかもしれない。もうちょっと画面を大きくしてみます。置き換わるのはあつという間ですので、もう置き換わっています。これで元のレイヤーを見えなくしますと、こういうふうに置き換わっているということが確認できるということになります。今のは非常に単純な例ですけども、実際の言語地図においても同じことはできるわけです。ただ、実際のウインドウ上では、この画面では複雑になりそうなので、簡単な略図でお見せしたいと思えます。イラストレータのバージョンは、基本的にはいま売られている 8 でも 10 でも動くことは確認されています。ちょっと途中画面で不具合が見えることはありますけれども、結果的には大丈夫ですので、いま売られているものであっても問題ないと思えます。バージョン 8 では十分なテストを行っていますので、まず、これは間違いなく動いているというふうに見ていただいてもいいかと思えます。これは略図用に作った白地図です。大きくしていけば、各ポイントにやっぱりこういう文字列が置いてあるというこ

とがお分かりになるかとおもいます。これは一番最後に配布プリントで付けているものですが、それでも、「ありがとう」の略図を作ってみようということで、こんな凡例を作ってみました。たとえば「アリガトーサマ」「アリガトーサン」であれば、こういう丸にちょっと角がついたような、まが玉と呼んでいますけれども、こういう記号にしましょうとか、「アリガタイ」だったら丸の記号にしましょう、「エガッタ」であればこんなマークにしましょう、「プコーラサ・オポーラ」これは琉球の形ですけれども、こういう形にしましょうという凡例をつくっておきます。そして、それぞれの記号に対して番号を与えます。与えた番号に従ってスウォッチというところに登録していくわけです。これは全部登録が済んでいますけれども、登録していけばいいわけです。各地点の番号と記号の対応表が別途必要です。これは丹念に作っていくしかありませんけれども、うちの研究室のホームページからダウンロードできるようになっているデータを基にしてやれば、これはできます。私もそのデータを使いながら、自分でまた自分用にデータを作り直したりしているものですが、それはどんなようなデータであるかという、こんなデータです。これもテキストファイルです。08の地点は1番の記号にしましょう、09も1番にしましょうといったことを表現しています。同じようなことで、ずっとこれは続きますけれども、2wと置いた地点は12番の記号にしましょう、3iも同じようにしましょうといったことをこれは表現しています。この中で、先ほどと同じように言語地図というLMSのプラグインを選んで、文字列を記号に置き換えなさいというものを選び、そして、さっき作ったテキストファイルを選びます。一応この場合もすべてのテキストを残して、新しいレイヤーを作成するんですがここでは併用の地点の新しいレイヤーは作らないで、一つのレイヤーで作っちゃうことにします。これは地点数は全然減らしていません。元の『方言文法全国地図』は全部で807地点ありますけれども、同じ地点数を置いています。どれぐらいの時間で出来上がるかというのを見ていただけるかと思えますけれども、あつと言う間ですね。もう今出来上がりました。地点の番号が出ているので、よく分かりづらいかもかもしれませんが、もうこれで、いま皆さんのお手元に配付している「ありがとう」の略図と同じものが出来上がっています。LMSの場合はさらに応用がありまして、置いた記号をまた別の記号に置き換えることができます。この地図の場合、白黒で印刷することを念頭において作成したので、全部が白黒でできているんです。ちょっとこれだと残念だな、見にくいなということがあつたりするわけです。そこで別の記号に置き換えるということをやってみようということが出来ます。たとえば、「オーキニ」というのはどの辺に分布しているのか。ちょっと白黒では見にくい。そこだけカラーにしてみよう。それから、見てみると、「ありがとう」なのに「ゴチソー」とか「ゴチソーサマ」という地域がある。どこら辺にあるんだろうと気になったりするわけです。そこで、「オーキニ」とか、「ゴチソーサマ」とか、それがどの辺に分布しているのか。「オーキニ」は星印で示してみようかな、「ゴチソーサマ」というのはお箸のマークで出してみようかなと考えるわけです。そこで今度はLMSの中の記

号を別の記号に置き換えるというものを選びます。それで、今度はいま置いた記号を別の記号に置き換えてみます。そうするとこんなふうになりました。そうすると、「オーキニ」というのはけっこう目立って、よく分かりやすいと思いますけれども、近畿地方を中心にして分布しながら、けっこう東北地方のほうにも分布している様子が分かる。また、四国のほうにも延びていて、九州のほうにもけっこう「オーキニ」という地域が広がっている。一方、「ゴチソウサマ」。「ありがとう」のことを「ゴチソーサマ」、どうもおかしいんじゃないかというふうに思われるかもしれないんですけども、このように新潟から群馬、長野、山梨をへて静岡のほうに分布している。これだけ分布しているということは、しかもまとまっているという点からして、決してこれは間違いではなくて、この地域独自の言い方として「ありがとう」にあたる「ゴチソーサマ」という形があるんだなということも分かるわけで、このようにして使っていくことができる。このようなソフトです。時間のほうがあまりなくなってしまったんですけども、デモンストレーションしてみると、こんなような手順で言語地図をコンピュータの上で作っていくことができるということでした。皆さんに触ってもらおうということも考えていたんですけども、ちょっと時間があるかどうか、よく分かりません。総合司会のほうはいかがですか。今は御質問をまず受けると。

司会 ただいまの説明に関して何か御質問のある方はどうぞ。

参加者 1 地図上に新しい地点を追加する方法を教えてください。

大西 それは簡単にできます。今これは元の地図に戻しました。白地図に。海岸線とかはこれは当然変わらないわけで、たとえばこの辺に調査地点が追加されたような場合というようなお話ですかね。そうしますと、この上に地点コードというレイヤーを選んでおいて、地点コードという上に、イラストレータの場合、テキストを置く場合のツールというのはここにあります。これを選んで、この辺にこういうふうに置いて、たとえばこれは x b であるとかというふうにして、こうやって置いてしまえばそれで終わりです。要は、たまたまこれは文字に赤い色を与えているだけですので、色はあとでいくらでも変えられますので、こういうふうに追加していくことがいくらでもできます。

司会 よろしいでしょうか。ほかに何か。どうぞ。

参加者 2 「タカジケナイ」というのは、これは長野県ですか。これは「カタジケナイ」が変化したんでしょうか。

大西 これは最終的にできあがった地図についてのお話ですね。ちょっとお待ちください。「カタジケナイ」というのはこれですね。ここに現れていますね。どの辺に分布しているのかを簡単にやってみましょうか。長野県に 2 地点あるんですけども、そのほかにもけっこう分かれて分布しているようですね。おそらく文語的な「かたじけない」と関係するものだというふうに思われますけれども、必ずしもまとまった文法としてうまく出てくるものでもないようだということが、こうやって置き換えてみると、すぐ赤い色で示されているところから出てくるということはお分かりになるかと思います。ありがと

うございます。

司会 はい、どうぞ

参加者 3 これは作業は非常に簡単だと思われませんが、たとえばA大学とB大学が別々に同じような地域で調査をした場合に、データは似たような格好だけれども、これを合わせるというのは非常に難しいと思うんですが、たとえば東経北緯をお使いにならなかった理由、あるいは国研がお作りになっている地域コードをお使いになっていない理由というのは何かございますでしょうか。

大西 AとBと大学が違っていても、等質の調査が行われていれば、それほどの違いは出てこない可能性はあるんじゃないかと思うんです。国研の全国調査の場合はいろんな大学の先生たちをお願いしています。

参加者 3 データだけがあって、それを同一の地図に表したいというときに適合させるのが、地域番号を手書きで今なさっているのがネックになるような気がいたしまして、それ以外の統一的なコード、あるいは北緯東経をお使いにならなかった理由は何なのかを教えていただければという。

大西 統一的なコードというのは研究所で使っている6ケタの番号ですね。これは6ケタにして全然問題はないんです。ただ、6桁にすると入力ミスを起こしやすいということがあったことが1点です。それから、6ケタにしちゃうと入力していくときにどこに置いているんだか分からなくなっちゃうんです。それで2ケタに置き換える。これは36進という方式を使って、2ケタにしてしまえば場所を取らないですから、狭い場所の中に数字を置いていけるということがあったものですから、それだけの理由で、非常に技術的な理由です。それから、エクセルなどから作った地図になぜしなかったのか。エクセルでも確かに地図化できるんですけども、イラストレータというのは、さっきお話ししましたように非常に印刷との相性がいいんです。最終的には印刷物というところがあるものですから、そこら辺の目標にかなっているというところで利用したというところがあります。

司会 よろしいでしょうか。はい、どうぞ。

参加者 4 今のようなお話を伺うと、『方言文法全国地図』は本の形で出していただくよりも、電子データの形で公表していただいたほうが、言語研究者にとっても、大学のような教育の場にとって利用範囲が広いように思うのですが、国語研究所長がオーケーと言えませんが、すぐにも出せる状態でしょうか。

大西 実は第5集に関しては全部ダウンロードできるようになっています。イラストレータのデータをすべてホームページに置いていますので、御覧になれるようになっています。ですから現実にはもうそのようになっています。ただ、4集以前のは機械で作っていませんでしたから、それをもう一度作り直すというのは、やっぱりこれはデータを作っていくといけないので手間になっちゃうんです。ですから、すぐにこれを出せといわれると、じゃあ、そのための予算をどうしようかということになりますけれども、

それは非常に手間と時間を要するものですから、すぐにできません。出来上がったものに関しては公開しております。

司会 そのほか、もし何か。どうぞ。

参加者 5 白地図の作成についてお伺いしたいんですけど、白地図の作成に関して、いま手作業で入れていらっしやいましたが、すべてプログラムで入れるみたいなことをやる予定はないのでしょうか。

大西 可能性はあると思うんですね。ただ、イラストレータというのはあくまでも画像のためのソフトなんです。ですから、座標的な扱いで経度緯度とを結び付けるということはイラストレータの中では基本的にできません。もしそれを本格的にやるんだったら、いわゆるGISのようなソフトですね。Arc Viewとか、そういったものを使うしかないと思います。ですから、やる予定はないというよりも、イラストレータの上では単体ではできないということだと思います。よろしいでしょうか。

司会 どうぞ。

参加者 5 CSV形式の数値データとしてのデータ公開というのはされる予定はございますでしょうか。

大西 CSVデータですね。これも公開しています。ですから、第5集のデータはすべて公開していますので、ダウンロードして利用できるようになっています。

司会 いかがでしょうか。そのほか何か御質問、コメント等あれば。

大西 ちなみにCSVに関しては、CSVそのものは非常に単純なデータですから、画像の上で何かいじっていく必要もないので、地図にするにはワンステップ踏まないといけないんですけども、2集から4集までのデータも公開しています。5集に関してはもう地図に直結する形でのデータで公開しています。

司会 ほかに何か御質問等、コメント、何でも結構です。じゃあ、どうぞ。

参加者 6 このデータベースを利用して、これから若い人はどんどん言語が変わって来ますので、そのシミュレートをもうそろそろやっておられるのでしょうか。どういうふうに変っていくとか。

大西 あくまでもソフトは地図を書くためのソフトなので、シミュレーションそのものはこれではできないですね。ですので、またシミュレーションのためのものというのは別に統計的なソフトでやっていくことが必要かと思います。今は我々のほうでは直接それはやっていませんけれども、関心を持って研究されている研究者の方は大学などにいらっしやいます。

司会 どうぞ。

参加者 7 国研のホームページからダウンロードできる白地図というのは日本の地図だけなんでしょうか。何かほかの地域の地図もダウンロードできるのか、お伺いしたいんですけども。

大西 白地図ですよ。

参加者7 はい。

大西 白地図は、基本的に文法地図用のデータですから、日本地図だけです。ただ、ベクトルデータの世界地図というのは市販されていますので、1万円ぐらいか。世界地図とか、いろんな種類のもので出ているので、その信頼性はよく知りませんが、検証していませんから。この手の、つまり、GISなどで使うようなデータに耐え得るかどうか分かりませんが、この程度というのか、言語地図のレベルのものを書くという点では、たぶんそれは世界地図がありますから、利用できるんじゃないかなと思います。イラストレータで読めます。ベクトルデータになっていますので。

参加者7 ありがとうございました。

司会 そろそろ時間ですけれども、どなたか。もう一方、二方、何かあれば。それでは、もし何かありましたら、また大西、三井のほうに直接質問していただければ幸いです。それでは、今日の「ことば」フォーラムのプログラムはこれで全部終了いたしました。皆様御協力ありがとうございました。次回の「ことば」フォーラムは3月15日に中目黒GTホールで「ビジネスや留学にいきる言葉の力とは？」というタイトルで行われます。またこちらのほうも御参加ください。それから、アンケートのほう、ぜひご記入いただいて、お帰りの際に御提出ください。よろしく願いいたします。

<終了>